

【Ⅱ】 香る草と香る木

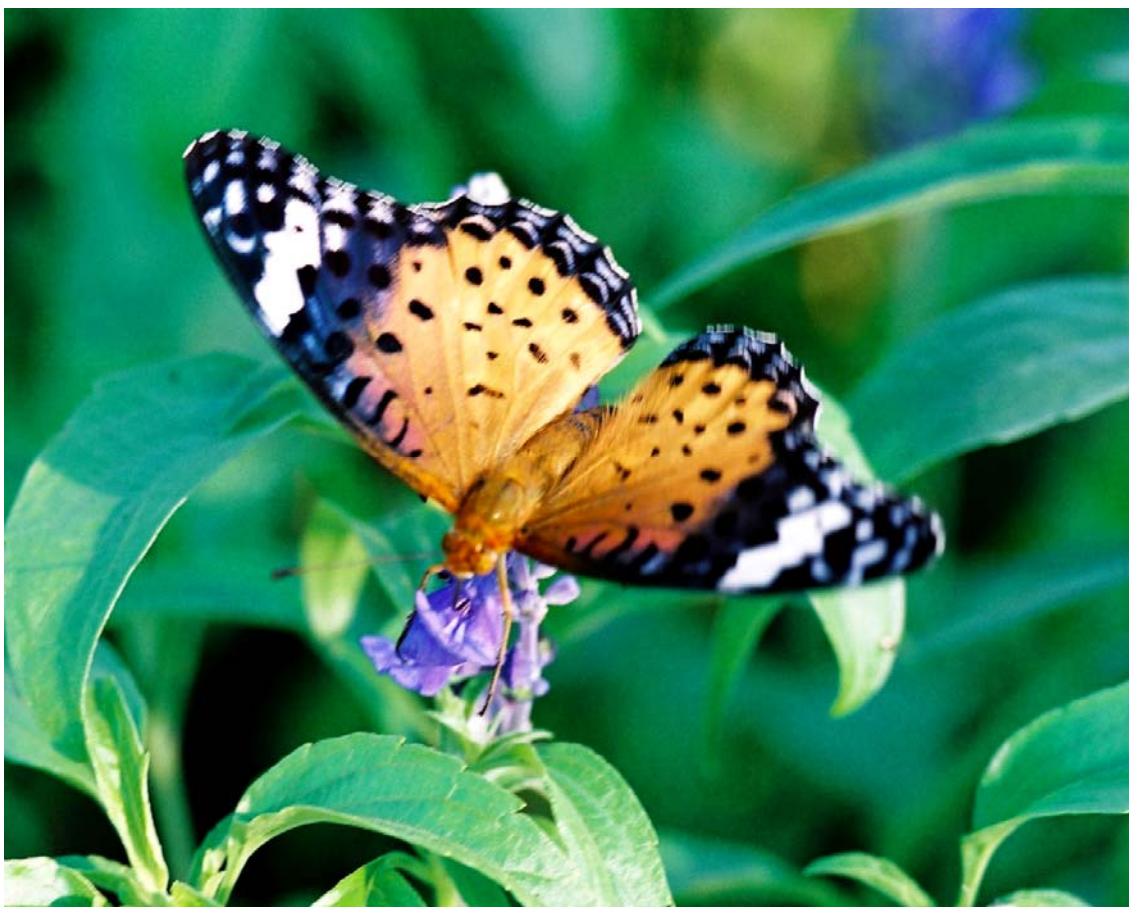
世をあげて香草ブームである。女性向けの月刊誌では毎月のようにハーブだの香木だのが特集されている。しかし香草、香木といっても、珍しいわけでもなんでもない。日本に分布する香草は、最も普通に見られる紫蘇(シソ)や三つ葉を初めとして、生姜(ショウガ)や茗荷(ミョウガ)、それに山葵(ワサビ)など数多い。また香木にしても山椒やミカンなどの柑橘類や『夏休みを思い出す樹木』のところで取り上げたクスノキなど、数多く分布し、また栽培もされている。そしてこうした植物の多くのは、**アルカロイド**や**配糖体**を含んでおり、人間にとって有益であったり、はたまた有害であったりするものも少なくない。

人間と植物の歴史をたどってみると、花としての美しさを追求するようになってから、まだほんの1,000年~2,000年ぐらいのもので、それ以前の100,000年とも、200,000年ともいう歳月は、それぞれの植物が人間にとって、どのように役に立つのかを、いわば模索する時代であった。つまり花の美しさを愛でるようになるまでに、人間の歴史全体の99%もの歳月が費やされてきたわけで、ここに至るまでに殆んど無限の試行錯誤が、繰り返されて来たといっても過言ではない。薬草にしる、ハーブにしる、いわばそういう歴史の上に成り立っているわけで、このことを忘れて植物を語ることはできないだろう。この長い歴史の中で、ある植物は建築や家具や、楽器、彫刻、器具として用いられ、ある植物は人間や家畜の大事な食料として、またある植物は衣料や染色や薬として栽培されてきた。そしてほんのわずかな植物は香りのために、祈りのために、そして時には呪いのために用いられてきたのである。

香草ブームはこうした人間と植物との歴史を、とかく無視して語られる傾向にあるが、その原産地がどこであれ、人間の歴史と深く結びついて、今日に至っている事を忘れてはならないだろう。ここでは日本で古くから栽培され、人々に親しまれてきた香草と香木を中心に、世界でよく栽培されている香草類をいくつか取り上げて、その歴史と民俗について探ってみることにしたい。

※**アルカロイド(alkaloid)**=植物の分子内には窒素を含み塩基性を示す化合物を含むものがある。これらを総称してアルカロイドといい、「アルカリのようなもの」という意味で、塩基性を示すものが多いが、そうでないものもある。かつては植物塩基ともいったが、植物外でも同質のものがあり、現在ではアルカロイドと総称している。

※**配糖体(glycoside グリコシド)**=植物には糖以外の物質と、オリゴ糖(糖の中では少数の糖鎖で成立しているもの)が結合した成分群があり、後者を総称し配糖体と言う。サポニンなどの苦味成分や、アントシアニンなどの色素類がよく知られている。



上はハーブの花に来たツマグロヒョウモン(所沢市)。下はハーブの咲き続く道(山梨県清里町)。

この項に記されている植物のリスト

【Ⅱ】 香る草と香る木

05-02-00-1

1) シソ=紫蘇	05-02-01-1
2) ミツバ=三つ葉	05-02-02-1
3) ワサビ=山葵	05-02-03-1
4) カラシナ=辛子菜	05-02-04-1
5) ニラ=韭	05-02-05-1
6) ニンニク=大蒜	05-02-06-1
7) ラッキョウ=辣韭	05-02-07-1
8) ネギ=葱	05-02-08-1
9) ショウガ=生姜	05-02-09-1
10) ミョウガ=茗荷	05-02-10-1
11) トウガラシ=唐辛子	05-02-11-1
12) サンショウ=山椒	05-02-12-1
13) ラベンダー	05-02-13-1
14) セイジ	05-02-14-1
15) バジル	05-02-15-1
16) ミント=ハッカ=薄荷	05-02-16-1
17) ローズマリー	05-02-17-1
18) セロリ	05-02-18-1
19) アニス	05-02-19-1
20) コエンドロ	05-02-20-1
21) クミン	05-02-21-1
22) ウイキョウとヒメウイキョウ=茴香と姫茴香	05-02-22-1
23) パセリ	05-02-23-1
24) コショウ=胡椒	05-02-24-1
25) チョウジ=丁字=丁子	05-02-25-1
26) ニッケイとシナモン=肉桂	05-02-26-1
27) ニクズク=肉荳蔻	05-02-27-1

目次に戻る
